

## 【A年】復活節第2主日(2025年4月27日)

## 【旧約聖書日課】イザヤ書 65章17～25節

- 17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。  
初めからのことを思い起こす者はない。  
それはだれの心にも上ることはない。
- 18 代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。  
わたしは創造する。  
見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして  
その民を喜び楽しむものとして、創造する。
- 19 わたしはエルサレムを喜びとし  
わたしの民を楽しみとする。  
泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。
- 20 そこには、もはや若死にする者も  
年老いて長寿を満たさない者もなくなる。  
百歳で死ぬ者は若者とされ  
百歳に達しない者は呪われた者とされる。
- 21 彼らは家を建てて住み  
ぶどうを植えてその実を食べる。
- 22 彼らが建てたものに他国人が住むことはなく  
彼らが植えたものを  
他国人が食べることもない。  
わたしの民の一生は木の一生のようになり  
わたしに選ばれた者らは  
彼らの手の業にまさって長らえる。
- 23 彼らは無駄に労することなく  
生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。  
彼らは、その子孫も共に  
主に祝福された者の一族となる。
- 24 彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え  
まだ語りかけている間に、聞き届ける。
- 25 狼と小羊は共に草をはみ  
獅子は牛のようにわらを食べ、  
蛇は塵を食べ物とし  
わたしの聖なる山のどこにおいても  
害することも滅ぼすこともない、  
と主は言われる。

## 【使徒書日課】使徒言行録 13章26～31節

<sup>26</sup>兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならび  
にあなたがたの中にいて神を畏れる人たち、こ  
の救いの言葉はわたしたちに送られました。<sup>27</sup>エ  
ルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエ  
スを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言  
者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めること  
によって、その言葉を実現させたのです。<sup>28</sup>そし  
て、死に当たる理由は何も見いだせなかったの  
に、イエスを死刑にするようにとピラトに求め  
ました。<sup>29</sup>こうして、イエスについて書かれてい  
ることがすべて実現した後、人々はイエスを木  
から降ろし、墓に葬りました。<sup>30</sup>しかし、神はイ  
エスを死者の中から復活させてくださったので  
す。<sup>31</sup>このイエスは、御自分と一緒にガリラヤか  
らエルサレムに上った人々に、幾日にもわたっ  
て姿を現されました。その人たちは、今、民に  
対してイエスの証人となっています。

## 【福音書日課】マタイによる福音書 28章11～15節

<sup>11</sup>婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は  
都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告  
した。<sup>12</sup>そこで、祭司長たちは長老たちと集まっ  
て相談し、兵士たちに多額の金を与えて、<sup>13</sup>言っ  
た。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝  
ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。  
<sup>14</sup>もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総  
督を説得して、あなたがたには心配をかけないよ  
うにしよう。」<sup>15</sup>兵士たちは金を受け取って、教  
えられたとおりにした。この話は、今日に至るま  
でユダヤ人の間に広まっている。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書65章17～25節

- 17 見よ、私は新しい天と新しい地を創造する。  
先にあったことが思い出されることはなく、  
心に上ることもない。
- 18 しかし、わたしが創造するものを  
代々とこしえに楽しみ、喜べ。  
私はエルサレムを創造して喜びとし  
その民を楽しみとする。
- 19 私はエルサレムを喜びとし  
私の民を楽しみとする。  
そこに再び、  
泣く声や叫び声が聞かれることはない。
- 20 そこにはもはや、数日の命の乳飲み子も  
自らの寿命を満たさない老人もいなくなる。  
百歳で死ぬ人は若者とされ  
百歳にならないで死ぬ者は  
呪われた者とされる。
- 21 彼らは家を建てて住み  
ぶどうを植えてその実を食べる。
- 22 彼らが建てて別の人が住むことはなく  
彼らが植えて別の人が食べることもない。  
私の民の一生は木の一生のようになり  
私が選んだ人々は  
自分たちの手の業を享受する。
- 23 彼らは無駄に労することなく  
産んだ子を災いにさらすこともない。  
彼らは、主に祝福された者の子孫となり  
その末裔も彼らと共にいる。
- 24 彼らが呼ぶより先に、私は応え  
彼らがまだ語っている間に、私は聞き届ける。
- 25 狼と小羊は共に草を食み  
獅子は牛のようにわらを食べ、  
蛇は塵を食べ物とし  
私の聖なる山のどこにおいても  
これらは危害を加えることも、  
減ぼすこともない、  
——主は言われる。

## 使徒言行録13章26～31節

<sup>26</sup>兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中で神を畏れる方々、この救いの言葉は私たちに送られました。<sup>27</sup>エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を、イエスを裁くことによって実現させたのです。<sup>28</sup>そして、死刑に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを殺すようにとピラトに求めました。<sup>29</sup>こうして、イエスについて書かれてあることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。<sup>30</sup>しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。<sup>31</sup>このイエスは、御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日にもわたって姿を現されました。その人たちは今、民に対してイエスの証人となっています。

## マタイによる福音書28章11～15節

<sup>11</sup>女たちが弟子たちのところに向かっている間に、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。<sup>12</sup>そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、<sup>13</sup>言った。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。<sup>14</sup>もしこのことが総督の耳に入ったとしても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」<sup>15</sup>兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・4月27日「復活節第2主日」の日課主題は「復活顕現」。「復活日」に続く主日は、引き続き「復活祭」の祝いの中に位置づけられ、「復活顕現伝承説話」に即した聖書日課が定められてきた。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、終章近くに置かれた終末的な天地の再創造を預言する箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、第一次バルナバ宣教団のピシディア州伝道でパウロが会堂で行ったスピーチを伝える箇所の一部。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「空の墓」の報告を受けたユダヤ指導者らの対応を伝える箇所。

**旧約日課(イザヤ 65 章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。本書の基本的な体裁は、冒頭 1:1 で提示されているように、前 8 世紀の南王国ユダで四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に仕えた宮廷預言者「アモツの子イザヤ」の預言句および預言活動記録を年代順に編纂したものであるが、この標題に即した内容は 39 章までであり、40 章以下は、通説として後代の付加とみなされている(これを「第二イザヤ」と称することがある)。40 章以下の「第二イザヤ」には、前 6 世紀に台頭した覇権国ペルシアの王「キュロス」の名が見られることから、ペルシア支配時代(前 539 年頃)以降に「預言者イザヤ」の伝統継承を自負する祭司・預言者集団によって告げられた預言句集が付加されて、正典「イザヤ書」の編纂が完成したものとみなされている。さらに、一部の学者は、付加された後半部の内容から、56 章以下を時代の異なる「第二の付加部分」とみなす(これを「第三イザヤ」と称する者もある)。しかし、これらの編纂過程についての所説は、上述した手がかりの他は、仮説に基づく推論に過ぎない。

・「第二イザヤ」あるいは「第三イザヤ」として扱われる部分には、「キュロス」の記述を除けば、39 章までに繰り返し表示される時代背景が示されていない。本預言書時代がそのように構成編纂している以上、40 章以下は、39 章までの預言を前提にしながら、それ以後の全時代を視野に入れて示される「普遍的預言」として読まれることを、本預言書自体が求めていると解さざるを得ない。それはつまり、39 章までで背景とされている時代の出来事が、本質においては後の時代にも繰り返し起こる歴史事象であるとの前提理解があるということである。日課箇所も、そのような視座に立って解釈することになる。

・日課箇所は、新しい天地が再創造されるという預言句から始められるが、ここで描写されるのは、宇宙論的な天地創造ではなく、象徴的な意味で「神の都」としての「エルサレム」の再建である。前 8 世紀の預言者イザヤの時代(ヒゼキヤ王の時代)に、エルサレム

は、アッシリア王センナケリブの包囲戦によって破滅の危機に瀕したが、破壊を逃れて存続した(前 700 年頃)。それからおよそ 100 年後、再び、バビロニア王ネブカドネツアルによる包囲戦によって破滅の危機に瀕したが、このときも破壊を逃れて存続した(前 598 年頃、第一次バビロン捕囚)。しかし、それから 11 年後、再度の包囲戦によって、エルサレムは陥落、神殿は破壊された(前 587 年頃)。このエルサレムの再建が、バビロニア支配下のユダの民の悲願であったが、キュロス王から始まるペルシア支配の時代に入って、ペルシア王への臣従を大前提としながらではあるが、ようやく着手されることになったと考えられている(エズラ記・ネヘミヤ記を参照)。このエルサレムの再建は、繰り返し破壊の危機に晒されてきたアッシリア～バビロニア時代が終焉し、新しい世界秩序が構築されることを象徴的に示すものと解されているのであろう。

**使徒書日課(使徒 13 章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続編として編集編纂された「初代教会正史」を物語る歴史書。ガリラヤから主イエスに従ってエルサレムに至った初期の 120 人ほどの弟子集団から始まった教会が、ディアスポラ系ユダヤ人によって世界各地に拡散、展開し、分裂の危機を乗り越えながら、使徒らや宣教者らの働きによって、調停的で包摂的な教会ネットワークを形成していくようになるまでを、前半は使徒ペトロを中心に、後半は宣教者パウロを中心に描いている。

・日課箇所は、シリア・アンティオキア教会の派遣した「バルナバ宣教団」が最初の宣教旅行で訪れたピシディア州アンティオキアでの出来事を描く箇所の中の一部で、会堂礼拝に参加したパウロとバルナバが、求められて会衆に向けてスピーチをした際の演説内容として伝えられているものの一部。実際の演説の記録とは考えにくい、「バルナバ宣教団」に象徴される使徒ペトロらを核とした初期教会の主流グループが宣教使信としていた内容が反映されていると考えられる。

・本書は「ルカ福音書」の続巻として著されたものであり、同福音書を前提としているので、日課箇所でも述べられている主イエスの公生涯および死と復活に関する記述も、同福音書の叙述に沿ったものとなっている。これは、他の箇所の使徒らの演説も同様である。それらに共通する特徴は、主イエスの出来事、殊に死と復活に関連する出来事を、徹底的に「神」を主語として描いているという点である。すなわち、「人々」を主語としてなされる人間の意図にもかかわらず、「神」が人間の意図を超えた意図をもってより大きな救済の出来事を推し進められた、という視座で描かれている。この視座において、本書は、主イエスの「死」については「人々」の為した結果として、主イエスの「復活」については「神」の御業としている。

## 福音書日課(マタイ 28 章より)

・日課箇所は、主イエスの復活顕現伝承の一部としてマタイ福音書のみが伝える逸話で、四福音書が共通して伝える「空の墓の出来事」に対するユダヤ人社会の見方を示す説話となっている。この説話は、マタイ福音書においては、主イエスの遺体埋葬の翌日に墓の監視をユダヤ人らが求めた逸話(27:62～66)を踏まえている。実際に当時のユダヤ人社会でこのような言説が流布していたのかどうかは、確かめられない。

・11 節「番兵」は、ギリシア語「クーストディア」で、ラテン語で「衛兵」を意味した「クストディア」の音訳。同じ用語が用いられているのは、27:65～66 の「番兵」で、死体の盗難を危惧する祭司長やファリサイ派に対して総督ピラトが「番兵」を監視役として置くように指示している。他方で、「空の墓の出来事」(28:1～10)の中で描かれる「番兵」(28:4)は、ギリシア語「テールンテス」で、「守る」(19:7、23:3、28:20)、「見張る」(27:36)、「見守る」(27:54)と訳される「テーレオー」の人称名詞形。復活顕現伝承説話における「番兵」に関する記述はマタイ福音書にしか見られず、どちらの用語も他福音書には用例がない。マタイは、「守る」(テーレオー)を肯定的に用いており、遺体盗難疑惑ごとくに「衛兵」が配置されたと描くのも、「見張る」ことの意義を重視しているからこそなのだろう。しかし、その「見張り」を掻い潜るようにして「遺体」が喪失したと描くことによって、マタイは、「主イエスの遺体」が「見張り、守る」べき対象ではない、と主張しようとしているのかもしれない。

## 来週の誕生日 (4 月 20 日～26 日)

## 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-328「ハレルヤ、ハレルヤ(たたかいは終わり)」(= I 146)は、17 世紀のラテン語聖歌を 19 世紀英国国教会のニールが英訳、さらにフランシス・ポットの改訳に基づいて英語讚美歌集に収められて広く歌われるようになった。曲は、16 世紀の代表的作曲家バレストリーナの名が記されているが、彼の曲にヒントを得て 19 世紀英国の音楽家ウィリアム・モンクがポットの英訳詞のために作曲。
- ・21-333「主の復活、ハレルヤ」は、20 世紀後半のタンザニア・ルター派牧師キヤマニワがスワヒリ語で作詞しハヤ族の伝統的旋律を付して発表。原曲は結婚式における宗教儀式で歌われる舞踏歌。ルター派でドイツ語に訳され広く知られるようになった。
- ・21-579「主を仰ぎ見れば」は、1931 年版『讚美歌』編纂に先立って行われた讚美歌公募に際して、旧日本基督教会牧師・宮川勇が応募した作品の一つで、黙示録 21～22 章に着想を得てまとめた詩が原案とされる。曲も、同じ公募に応募した中学校音楽教師・土屋初枝の作曲した作品。
- ・21-180「去らせたまえ」は、「シメオンの賛歌」を歌う賛歌。スイスの宗教改革者 J・カルヴァンの教会で音楽を担当したブルジョワが作曲し、カルヴァン編纂の「ジュネーブ詩編歌集」に収められてきた。

## 21-328「ハレルヤ、ハレルヤ」= I 146

## Finita Jam Sunt Praelia

Alleluia, Alleluia, Alleluia.  
 Finita iam sunt proelia, / Est parta iam victoria: / Gaudeamus et canamus, / Alleluia.  
 Post fata mortis Barbara / Devicit Jesus tartara: / Applaudamus et psallamus, / Alleluia.  
 Surrexit die tertia / Caelesti clarus gratia / Insonemus et cantemus, / Alleluia.  
 Sunt clausa stygis ostia / Et caeli patent atria: / Gaudeamus et petamus, / Alleluia.  
 Per tua, Jesu, vulnera / Nos mala morte libera, / Ut vivamus et canamus, / Alleluia. Alleluia!  
 Alleluia! Alleluia! Alleluia!

## English Translation

Alleluia! Alleluia! Alleluia!  
 1. The strife is o'er, the battle done; / Now is the Victor's triumph won; / Now be the song of praise begun. / Alleluia!  
 2. Death's mightiest powers have done their worst, / And Jesus hath His foes dispersed; / Let shouts of praise and joy outburst. / Alleluia!  
 3. On the third morn He rose again / Glorious in majesty to reign; / Oh, let us swell the joyful strain! / Alleluia!  
 4. He closed the yawning gates of hell; / The bars from heaven's high portals fell. / Let songs of praise His triumph tell. / Alleluia!  
 5. Lord, by the stripes which wounded Thee. / From death's dread sting Thy servants free / That we may live and sing to Thee. / Alleluia!  
 Alleluia! Alleluia! Alleluia!

## 21-333「主の復活、ハレルヤ」

## Mfurahini, haleluya

## English Translation

## Christ has arisen, alleluia

1. Christ has arisen, alleluia. / Rejoice and praise Him, alleluia. / For our Redeemer burst from the tomb, / Even from death, dispelling its gloom.  
 Refrain:  
 Let us sing praise to Him with endless joy; / Death's fearful sting He has come to destroy. / Our sin forgiving, alleluia! / Jesus is living, alleluia!
2. For three long days the grave did its worst / Until its strength by God was dispersed. / He who gives life did death undergo; / And in its conquest His might did show. / (Refrain)
3. The angel said to them, "Do not fear! / You look for Jesus who is not here. / See for yourselves the tomb is all bare; / Only the grave cloths are lying there." / (Refrain)
4. "Go spread the news: He's not in the grave; / He has arisen this world to save. / Jesus' redeeming labors are done; / Even the battle with sin is won." / (Refrain)
5. Christ has arisen; He sets us free; / Alleluia, to Him praises be. / Jesus is living! Let us all sing; / He reigns triumphant, heavenly King. / (Refrain)

## 21-180 番「去らせたまえ」

## Nunc Dimittis

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium, et gloriam plebis tuae Israel.